

1. (平面に対するグリーンの定理) $\mathbf{J}(x, y) = u(x, y)\mathbf{i} + v(x, y)\mathbf{j}$ とする . このとき以下の問いに答えよ .

(1) 体積 V として z 軸に平行な柱体 (z 軸に垂直な断面はどこも同じ形状とする) を考える . このとき , V の表面 S でのベクトル面積素 $d\mathbf{S}$ が $d\mathbf{S} = dz(dy\mathbf{i} - dx\mathbf{j})$ で与えられることを示せ .

(2) ガウスの定理を用いて

$$\int_S \left(\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} \right) dx dy = \oint_C (u dy - v dx)$$

を示せ . ここで S は $z = 0$ における V の断面 , 積分経路 C は S の境界線である .

2. (ストークスの定理) ベクトル場 \mathbf{J} を閉曲線 C について線積分したものを , \mathbf{J} の C についての循環という . 循環を記号 Γ であらわすと

$$\Gamma = \oint_C \mathbf{J} \cdot d\mathbf{r}$$

である . このとき以下の問いに答えよ .

(1) 3 点 $P_0 = (x, y, z)$, $P_1 = (x + \Delta x, y, z)$, $P_2 = (x, y + \Delta y, z)$ を取り , $\overrightarrow{P_0P_1}$ と $\overrightarrow{P_0P_2}$ の作る平行四辺形の周を C とする . このとき

$$\lim_{\Delta x, \Delta y \rightarrow 0} \frac{\Gamma}{\Delta x \Delta y} = (\text{rot } \mathbf{J}) \cdot \mathbf{k}$$

を示せ . これは回転の z 成分が , z 軸に直交する無限小面積の周についての循環 (ただし単位面積当たり) に等しいことを意味する .

(2) $P_1 = (x + \Delta x_1, y + \Delta y_1, z + \Delta z_1)$, $P_2 = (x + \Delta x_2, y + \Delta y_2, z + \Delta z_2)$ とするとき ,

$$\lim_{\Delta x_{1,2}, \Delta y_{1,2}, \Delta z_{1,2} \rightarrow 0} \frac{\Gamma}{\Delta S} = (\text{rot } \mathbf{J}) \cdot \mathbf{n}$$

を示せ . ここで ΔS は $\overrightarrow{P_0P_1}$ と $\overrightarrow{P_0P_2}$ の作る平行四辺形の面積 , \mathbf{n} はその法線ベクトルである .

(3) C を有限な閉曲線 , S をその内部を満たす面とする時 ,

$$\oint_C \mathbf{J} \cdot d\mathbf{r} = \int_S \text{rot } \mathbf{J} \cdot d\mathbf{S}$$

が成り立つことを示せ . これをストークスの定理という .

3. (ストークスの定理の応用)

(1) ストークスの定理を用いて $\text{rot grad } \varphi = 0$ を証明せよ .

(2) 任意の閉曲線 C において

$$\oint_C f \text{ grad } g \cdot d\mathbf{r} = - \oint_C g \text{ grad } f \cdot d\mathbf{r}$$

を示せ .

(3) $\mathbf{r} = (x, y, z), r = |\mathbf{r}|$ とするとき , 任意の閉曲線 C において

$$\oint_C r^k \mathbf{r} \cdot d\mathbf{r} = 0$$

を示せ . ただし k は整数とする .

4. (一般化座標) 座標 \mathbf{r} を直交直線座標 (x, y, z) に代わる 3 つの変数 (u, v, w) で表す場合を考える . u, v, w はそれぞれ x, y, z の関数である . 例えば円筒座標では変数として (r, ϕ, z) を使い , それぞれ x, y, z と次の関係にある .

$$r = \sqrt{x^2 + y^2}, \phi = \arctan\left(\frac{y}{x}\right), z = z$$

球座標 (r, θ, ϕ) では

$$r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}, \theta = \arctan\left(\frac{z}{\sqrt{x^2 + y^2}}\right)^{1/2}, \phi = \arctan\left(\frac{y}{x}\right)$$

である .

(1) 直交直線座標と円筒座標の幾何学的関係を図示し , (x, y, z) を (r, ϕ, z) を用いて表せ .

(2) 直交直線座標と球座標の幾何学的関係を図示し , (x, y, z) を (r, θ, ϕ) を用いて表せ .

u 曲線とは , v, w を固定して u を変化させた時に座標 \mathbf{r} が描く軌跡のことを言う . その接ベクトル \mathbf{r}_u は次式で与えられる

$$\mathbf{r}_u = \frac{\partial x}{\partial u} \mathbf{e}_x + \frac{\partial y}{\partial u} \mathbf{e}_y + \frac{\partial z}{\partial u} \mathbf{e}_z$$

v, w 曲線およびその接ベクトル $\mathbf{r}_v, \mathbf{r}_w$ は同様に定義される . これら接ベクトルの方向をそれぞれ u, v, w 方向という .

(3) 円筒座標において $\mathbf{r}_r, \mathbf{r}_\phi, \mathbf{r}_z$ を $r, \phi, z, \mathbf{e}_x, \mathbf{e}_y, \mathbf{e}_z$ を用いて表せ .

(4) 球座標において $\mathbf{r}_r, \mathbf{r}_\theta, \mathbf{r}_\phi$ を $r, \theta, \phi, \mathbf{e}_x, \mathbf{e}_y, \mathbf{e}_z$ を用いて表せ .

u 曲線のスケール因子 h_u とは , u 方向接ベクトルの長さ $|\mathbf{r}_u|$ のことを言う . ここから u 方向単位ベクトル \mathbf{e}_u が

$$\mathbf{e}_u = \frac{\mathbf{r}_u}{h_u} \text{ または } \mathbf{r}_u = h_u \mathbf{e}_u$$

と定義される . v, w 曲線のスケール因子 h_v, h_w , v, w 方向単位ベクトル $\mathbf{e}_v, \mathbf{e}_w$ も同様に定義される . $\mathbf{e}_u, \mathbf{e}_v, \mathbf{e}_w$ は一般化座標系 (u, v, w) での基本単位ベクトルである .

(5) 円筒座標において h_r, h_ϕ, h_z を求めよ .

(6) 球座標において h_r, h_θ, h_ϕ を求めよ .

5. (面積素と体積素) 一般化座標 (u_1, u_2, u_3) における面積素 dS_{ij} と体積素 dV はそれぞれ

$$dS_{ij} = \mathbf{r}_i \times \mathbf{r}_j du_i du_j$$

$$dV = |\mathbf{r}_1 \cdot (\mathbf{r}_2 \times \mathbf{r}_3)| du_1 du_2 du_3$$

であらわされる . ただし , ここでは和の規約は用いず , 式の簡略化のため $\mathbf{r}_{u_j} = \mathbf{r}_j, h_{u_j} = h_j$ と記す .

(1) 各点で接ベクトル \mathbf{r}_i ($i=1,2,3$) が互いに直交している座標系を直交曲線座標という . このとき

$$dS_{ij} = h_i h_j \mathbf{e}_i \times \mathbf{e}_j du_i du_j = \varepsilon_{ijk} h_i h_j \mathbf{e}_k du_i du_j$$

$$dV = h_1 h_2 h_3 du_1 du_2 du_3$$

を示せ . ここで \mathbf{e}_j は u_j 方向基本単位ベクトルをあらわす . 和の規約は用いない .

(2) 円筒座標と球座標は直交曲線座標であることを示せ

(3) 円筒座標と球座標における体積素の表式をそれぞれ求めよ .

6. (直交曲線座標における grad) スカラー場 ϕ の勾配 $\text{grad } \phi$ はベクトルであり , 直交直線座標系の基本単位ベクトルを用いて

$$\text{grad } \phi = \frac{\partial \phi}{\partial x_i} \mathbf{e}_i$$

と表される．これを直交曲線座標 (u_1, u_2, u_3) で表すには，この直交曲線座標の基本単位ベクトル e_{u_j} を用いる．各成分 $(\text{grad } \varphi)_{u_j}$ は $\text{grad } \varphi$ を各基本単位ベクトルの方向に射影したもののなので

$$(\text{grad } \varphi)_{u_j} = \text{grad } \varphi \cdot e_{u_j} = \frac{\partial \varphi}{\partial x_i} e_i \cdot e_{u_j}$$

となる．

このとき以下の問いに答えよ．

- (1) $e_i \cdot e_{u_j} = \frac{1}{h_j} \frac{\partial x_i}{\partial u_j}$ を示せ．この表式では和の規約は用いず，スケール因子は $h_{u_j} = h_j$ と記すものとする [ヒント：問題 4 の e_{u_j} の定義を思い出す]．

- (2) 恒等式 $\frac{df(x_1(\xi), x_2(\xi), x_3(\xi))}{d\xi} = \frac{\partial f}{\partial x_i} \frac{dx_i}{d\xi}$ を利用し，

$$(\text{grad } \varphi)_{u_j} = \frac{1}{h_j} \frac{\partial \varphi}{\partial u_j}$$

を示せ．この表式も和の規約は用いない．

- (3) 円筒座標における勾配は

$$\text{grad } \varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial r} e_r + \frac{1}{r} \frac{\partial \varphi}{\partial \phi} e_\phi + \frac{\partial \varphi}{\partial z} e_z$$

と表されることを示せ．

- (4) 上と同様に，球座標における $\text{grad } \varphi$ の表式を書き下せ．